

当時私の受講した研修の名称は「初級産業カウンセラー養成講座」で、旧労働省所管の公的資格だったのです。役所の認定した公的資格であることにも信頼性を感じ、ちゅうちよせずに飛び込みました。ただ毎日忙しく過ごしている中、通学する時間の確保は難しいとの思いから「通学講座」ではなく当時あつ

ナビゲーター

た「通信講座」を選択しました。通信といっても連続2日間の実習を何度かこなさなければならぬので、後で考えれば負担は大きかったように思います。しかし研修は、きわめて中身の濃いものであったと記憶しております。

また、当時は現在ののような研修用の製本さ

33

産業カウンセラーの現場から 相談者の思いに共感して伴走する

初級講座でなるほどの連続

れたテキストではなく、10冊くらいの書籍がドンとダンボールで送られてきました。そして、それを読んでからすぐにレポートを送るようになっていました。私は少し戸惑いましたが、それらの書籍を読み進めてゆくとそれなりに納得ができるようになってきたのです。なるほどの連続でレポートの提出を始めました。

最初の2日間のレポートの提出が終わったあとは実習でした。会社になんとか無理を言い、2泊3日の日程で大阪まで出かけ実習です。正直、実習に期待していて、やっとカウンセリングというものが学べるとワクワクし

私の失敗談と気づき(中)

た気持ちで赴きました。しかしここでの実習は傾聴につぐ傾聴でした。初日は丸一日の傾聴で終わりました。少し疑問が湧いてきました。「なんだ、これは人の話をうなずいて聞くだけじゃないか」と。こんなことで人の心が変わるのかと疑いの気持ちでいっぱいになりました。本当にこんな傾聴を学んで、それを実際にいまの職場で生かせるのか？部下たちの顔、役員や上司の顔が浮かんできました。研修に対して大いに疑問を持ちました。こんなカウンセリングでは、なかなか現実の企業社会において有効に活用できるものでないと思ってしまうのです。

でも2日目の実習の時に、自分がクライアント役になり今まで自分の悩んでいたことを話したのです。このような場がないと人に弱音を吐けなかった自分があることに気づきました。吐き出すと相手は否定せずにうなずいてくれます。ここでハッと気づきがありました。これだ！安心して話せる雰囲気なら自分の思いを素直に出せるんだとの気があつたのです。しかし相手は同じ研修仲間、かつ資格を取得した「カウンセラー」ではありません。でも自分のことを話してみても、今までのモヤモヤしたものが少し晴れた気がしたのです。この時、「傾聴」の意味が漠然とはあるがわかりかけてきたのです。

【日本産業カウンセラー協会中部支部事業推進部長、産業カウンセラー 古市吉輝】

(火曜日掲載)

